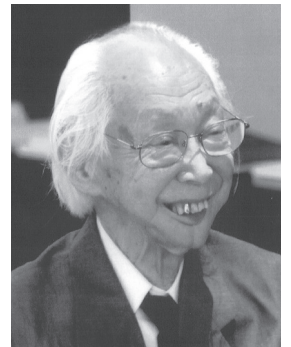


紺野 昭先生を偲んで

愛知大学 教授
戸田 敏行



初めて紺野昭先生にお会いしたのは昭和54年4月、創立2年目の豊橋技術科学大学（以下、技科大）に着任された時です。それ以降、第1期生として学部と修士課程を紺野研究室で、卒業後は先生が創設された地域計画コンサルタントの（株）地域計画連合、地域シンクタンクの（社）東三河地域研究センターでご指導を頂きました。先生のご活動の中では、後期に属する期間です。恩師である紺野先生を思い浮かべるときに、まず人間としての強烈な生き様を思わざるを得ません。それは、実践性ということであり、逆境に立つ精神であり、人の繋がりの重視です。これらは紺野研究室の卒業生が、例外なく肝に銘じた点です。

実践性は、戦後の工業開発を下河辺敦先生と一緒に担われた経験からのものであり、机上の論議には誠に厳しく指導いただきました。ご自分の経験でもあった四日市公害のことや、水利権の課題などを計画から派生する実態として話され、常に計画に伴う責任の取り方を念頭においておられました。地域計画連合の初期のことですが、朝会社に行くとき黒板に「サラリーマンは去れ」と先生の字で書いてあったと聞きます。逆境に立つ精神は、先生の人生そのものです。陸軍予備士官学校学生として、同窓生の死と生き残った自らの命をどう用いるかということであったと思います。時に「研究は死ぬか生きるかだ」と話されましたが、それは我々弟子の理解を越えたことでした。これを現実に見ることになるのが、昭和59年の舌腫瘍以降の病との戦いでした。舌の大半を切除し、顔半分の色が変わる大手術でしたが大学へ復帰。医学的事例にもなったという発声の努力を経て、その後の学生指導、国際会議、都市計画学会全国大会、支部設立など、身近に拝見させていただき壮絶というのみでした。

こうした強さの一方で、先生が優しさを示されるのが人との繋がりででした。東三河地域を先生は第2の故郷と呼んでおられました。それが東三河工業整備特別地域以来の地域の方々との繋がりに他なりません。先生は、個人的な人間関係を実に大切にされました。学生との関係も、その延長上にあったかも知れません。学生の就職を依頼した企業を雨に濡れながら尋ね、寧ろ先方が驚いておられたと、東大高山研究室の同窓に当たられる川手昭二先生（筑波大学名誉教授）から伺いました。技科大1期生が50代半ばを越えるので、卒業生の実績を、地域計画を学んだ東三河地域に返す

べきだという先生のお考えから、昨年研究室の論集を纏めることとなりました。その際に卒業生一人一人の現状を、年賀状等から記憶しておられたのには驚くばかりでありました。未完の論集をなんとか届けることが出来たのが、病院で意識を持っておられた最後の日になります。よりお元氣なうちに完成できなかったか、これは弟子一同の痛恨です。

地域計画プランナーとして、紺野先生がよく口にされたのが「計画のフィロソフィー」という言葉でした。先生の研究業績は工業立地原単位に代表され、明快な理論展開です。一方で、地域計画の実践は理論化しきれない部分が多出します。直接、先生に伺ったことはありませんが、そこに計画の哲学を求められたと感じます。フィロソフィー構築にあたって、2つの視点を強く求められました。第1は、地域の独自性から出発することであり、全国分析から始めると研究も躓くことを指導されました。これは研究オリジナリティに繋がるものであり、自分が開拓した分野を追うな、「リトル紺野」になるなど話されました。第2は、出来ることと出来ないことを区分することです。これは工業開発に伴う公害発生に、強くお感じのことであつたと思いますが、計画には不測の部分が必ず生じる。だからこそ出来る部分を明確にして、後は時間と共に修正せよということ。一つのプロジェクトに携わったら、最低10年はつき合うという原則を教えてくださいました。この両者が相まったのが、紺野先生と東三河地域の長期にわたる関係ではないかと思います。

紺野先生の思い出をまとめるにあたって、地域計画連合に設立時から参加し現在は東三河地域研究センター常務理事の金子鴻一氏、現地域計画連合社長の江田隆三氏と会合を持ち、川手先生にも助言を頂きました。先生の故郷である福島復興については、強い関心をお持ちで生前、新地町の現地事務所を訪ねられたと聞きます。豊橋時代を中心に戸田がまとめことになりましたが、思い返していると学生時代のことが多くなります。それが師と弟子の関係かもしれません。戦後の日本を工業立地という視点から描かれ、地域からの発想を尊ばれた先生は、人口減少や災害に直面する我が国の地域計画をどのように考えられるのか。とりわけ後年力を注がれた、東三河地域や三遠南信地域（愛知・静岡・長野県境地域）についてどうお考えになるのか。紺野先生の足跡から、もう一度学ばせて頂きたいという思いが強く残ります。

災害は他力，復興は自力の結集，故紺野昭先生からのメッセージ

—地域とともに，時代とともに歩んだ紺野先生を偲ぶ—

神戸大学大学院 教授

山崎 寿一

紺野昭先生は、1928年1月3日、紺野忠吉、てるご夫婦の次男（5人兄弟）として福島県で生まれ、福島中学、陸軍予科士官学校、航空士官学校を経て、終戦後、1945年10月に第二高等学校2年に編入、その後、1949年に北海道大学建築工学科2期生（当時旧制）として入学、1952年にご卒業されています。北大卒業後は、指導教授の大野和男先生のすすめで、計画系に転じ、東大の高山英華先生のもとへ進学されました。

1952年、東大大学院入学当時は、前期3年、後期2年の旧制で、高山研究室には助手の小島重次先生、院生に三輪雅久、川手昭二、大矢根雅弘の諸先輩がおられ、その後、宮沢美智雄、川上秀光、村田聖二、石田頼房、伊藤滋の諸氏らが入ってこられた時代です。紺野先生からは、大学院当時、川上先生と伊東忠太先生宅に下宿していたことや、建築学生会議の富士山麓調査に参加された思い出も伺っています。また紺野先生の退官時の寄せ書きには、石田先生から、紺野先生の御指導で静岡県須走村の調査をし、学会発表したのが私の研究者としてのスタート、伊藤先生からは、紺野さんにつれられて、当時の三菱の赤れんが街にあった昭和同人会にいったこと、あのような機会がなかったら、国土計画の分野にはいることはできませんでしたという思い出が寄せられていました。因みに豊橋技科大の紺野研の初代助手の小場瀬令二先生（筑波大学名誉教授）は都立大の石田研のご出身、豊橋技科大の新学長の大西隆先生は、東大の伊藤研究室のご出身です。

東大高山研究室の創成期のメンバーであった紺野先生は、我が国の戦後の都市計画、地域開発を推進する担い手として活躍されました。1955年10月に高山研の助手（東大工学部建築学科都市計画講座）に採用され、同年11月には建設省建築研究所に移られ、1965年1月に建研第一研究部都市計画室長、その後1968年8月に横浜国立大学助教授に転任されます。その間、1962年2月には東京大学から工学博士の学位を授与され、1960年に第一回日本都市計画学会石川奨励賞（下河辺淳氏と共同授賞「工業地の立地条件・計画単位・必要施設の研究」）、1962年に同学会石川賞、1965年には日本建築学会賞（論文部門）を受賞されています。この時期が紺野先生の都市計画第一期といえます。

1960年代後半から70年代は、我が国の都市計画、地域開発が躍進した時代で、都市・地域計画のプランナー、コンサルタントの職能が確立する時期でした。先生は、横浜国大着任後すぐに、大

学紛争で実践的研究が不可能となっていた大学を辞し、地域計画連合での活動に専念することになります。この時期が、先生の都市計画第二期といえます。それからの約10年間は、高度経済成長下の工業開発、港湾開発と都市計画、海外の地域開発プロジェクト等に邁進されました。紙面の都合で詳述できませんが、紺野先生の日本の戦後都市計画における大学・政府研究所・民間都市計画コンサルタント・地域シンクタンクにおいて都市計画の学術・実践を結び付け、育てた功績は特質に値すると思います。紺野先生のお葬式で弔辞をよまれた川手昭二先生は、戦後の都市計画・地域開発に果たされた紺野先生の役割・業績に敬意を払い、「紺野昭は、高山英華・門下生たちが最も誇れる仲間でした」という言葉で結んでおられました。

そして1978年に新設された豊橋技術科学大学の建設工学系建築・地域計画大講座の教授に着任され、14年間、地域とともに、時代とともに歩む大学づくりと教育・研究に取り組まれることになりました。紺野門下生には、戸田（愛大）、森（渡邊研・大阪市大）、岩崎（大工大）、熊野・目山（呉高専）、篠部・間瀬（瀬口研・呉高専）、宇高（兵庫県立大）やバンバン（インドネシア）、ホー（マレーシア、UTM）らがおり、先生の意思を受け継ぎ、実践的地域計画に取り組み、現在教鞭をとっています。豊橋技科大時代が先生の第三期、退職後が第四期といえます。

紺野先生は1993年3月に豊橋技科大を退官された後も、港のロマンを追求し、東三河地域研究センターの理事・顧問や地域計画連合の顧問としても精力的な活動を続けてられておりました。2012年6月に先生は豊橋技科大都市・地域計画研究室の門下生を集められ、最後の「ゼミ」を開かれました（三宅醇先生、小場瀬令二先生、大貝彰先生、2代目助手の山崎も出席）。声を完全に失われた先生は、パソコンの画面をスクリーンに映され筆談で我々にメッセージを投げかけられました。それは、我々に対する終戦後の国土の復興の経験からの教訓と東日本大震災からの復興、さらなる巨大災害への対応が迫られるプランナー・研究者に対する姿勢に関するメッセージで、「災害は時間的に瞬時であり、自然の力という他力による。復旧復興は長期的であり自力の結集である。」で結ばれていました。

門下生のみならず都市計画学徒の皆様にも先生の遺志をお伝えし、先生への追悼したいと思います。合掌。